

残留孤児の父 山本慈照翁 ゆかりの地

長野県阿智村を訪ねる

ちば中国帰国者支援交流の会 吉川雄作

昨年5月の本会総会の終わりに、長野県阿智村の「満蒙開拓団平和記念館」準備会事務局の寺沢秀文さんから、建設事業への協力呼びかけがあった。

中国残留孤児帰国事業に後半生を捧げた阿智村長岳寺の山本慈照翁については、生前、精力的に活動されていた頃のニュースやNHKの特集番組の断片的な記憶がある程度で、不確かな認識しかない。かねてからぜひ訪ねてみたいと思っていた。

2月下旬、「ちば中国帰国者支援交流の会」で、弁護士の宮腰さんから、「ふなばし憲法九条の会」主催の「阿智村を訪ねる旅」への誘いがあり、奥村氏らと共に参加した。

毎年3月が近づくこの時期、決まって話題にされることがいくつかある。

3月9日のNHK首都圏ニュースでは、「東京大空襲66年」を前に、東京都の「平和祈念館」建設構想が凍結されたままになっていることを取り上げていた。「凍結」ならば、いつか「解凍」される可能性があるということになるが、果たしてどうだろうか？

本来、この種の施設（戦争・戦災関連の記念館・祈念館等）は、国や都が率先して建設すべきものと思う。かつて訪れたロンドンの戦争博物館(War Museum)、キャンベラの戦争記念館(War Memorial)は、戦勝国だからといえばそれまでだが、それぞれに、確かな戦争検証と戦没者慰霊の場にふさわしいものに思えた。

しかし、日本では広島・長崎の原爆関連施設、沖縄県平和祈念資料館・平和の礎などの他は、小規模な資料館程度のものしかない。新宿三角ビル内の「平和祈念展示資料館」、千鳥ヶ淵の「戦没者墓苑」、靖国神社「遊就館」は、性格を異にするものと思う。

「東京大空襲」は一夜にして10万人以上の死者を出したと言われるが、未だに被災者（死者・負傷者など）の正確な数が確認されていない。東京都の「東京大空襲」関連の施設としては、関東大震災の犠牲者を祀る「震災記念堂」敷地内の「復興記念館」に、言わば間借り状態の「戦災関係資料展示」があるだけである。

唯一「東京大空襲」を検証・記録し、戦争が市民に及ぼす惨状を発信し、世代を越えた学びの場としての役割を担っているのが、江東区北砂にある「東京大空襲・戦災資料センター」であるが、これは東京大空襲の直接体験者である作家早乙女勝元氏の呼びかけと篤志家の土地提供、多くの被災者・遺族・賛同者の永年の資金協力の結果実現した施設であって、国や東京都の施設とは別物である（3月11日朝日新聞「声」に早乙女氏の投書あり）。

「戦争の傷は忘れない……」と言う人がいる。個人としての心情は理解できるが、同じ

ことを、そこそこの立場にある人や国が言ったりしたりするのはどうか。いつの頃からか、「できれば、なかったことにしたい……」かのような発言を聞くことも多くなった。忘れてはならないだけでなく、世代を越えて伝え、受け継いで行かなければならないことがある。

「満蒙開拓団」はその最たるものであろう。「国策」に従ってかの地に赴きながら、“皇軍”に置き去りにされてこの上は無い程の悲惨と無念を味わわされた「満蒙開拓団」の人々に対して、せめて事実の記録を確実に後世に伝えるための拠り所を建設することは、“国”としての最小限の責任だと考える。

今、それを長野県飯田市と阿智村の人々がやり遂げようとしている。



長岳寺はお世辞にも名利とは言えない“村のお寺”であった（戦前とは別位置とのこと）。実際、山本慈照和尚も寺の住職だけでは生活できないので、教員をしていたという。そして、そのことが自身の開拓団への参加のみならず、教え子たちをも満州の地に送り出すこと、ひいては敗戦後、残留孤児帰国に生涯尽力することにつながったのだという。

その山本慈照翁の精神を受け継ぐかたちで、町・村を挙げて、平和を守り、憲法 9 条を守る運動を、自治政策の基本にしているという。交流会の席で、飯田 9 条の会からの報告にあった、かつて行政が率先して開拓団を送り出したこと責任・反省から生まれたという、「役所を、再び住民を戦争に送る場にはならない」「“分村”の利は現地中国人の土地を奪うことで得られた、加害者の立場を忘れずに……」の言葉が、強く心に残る。

また、団体の活動内容と報告の公開を条件に、公民館の使用料を無料にしているとも聞いた。最近では、自治体が公民館などの管理を民間委託・有料化し、“政治活動”を標榜(?)する集会や催しを排除しようとする風潮を感じるが、一市民が「憲法を守ろう、戦争と平和について語ろう」というとき、これを“政治活動”などと言えるのだろうか。



「戦争はやーだに（祖谷溪）・戦争ほうき（箒）」とシャレる市民のユーモアとしたたかさと共に、飯田市や阿智村の毅然たる姿勢に感銘を受けた。

阿智村昼神温泉の朝市はじめ、あちこちに置かれた「湯屋守さま」。さほど伝統あるものとは思えず、由来も分からないが、遠目には笑っているように見えながら、近くに寄ると、目じりを吊り上げた厳しい表情で、世間を睨んでいるようにも見えた。

[2011 年 3 月]